

# 文学空間としての学習院大学「東別館」 —三島由紀夫『春の雪』—

学習院大学 文学部長  
日本語日本文学科 教授  
かん だ たつ み  
神田 龍身



## 『春の雪』とは

学習院の目白キャンパスについて、「キャンパス全体が巨大な博物館である」と言われます。今から約100年前、明治41年(1908)8月に学習院は初等科を除き、四谷から目白へ移転してきました。翌年7月に図書館が竣工しますが、その図書館が現在の北別館(大学史料館)にあたります。目白キャンパスには、このほか明治期の建物として乃木館・厩舎が、大正時代の建物として東別館が現存しています。

明治41年に乃木希典院長の提案により、全寮制の理念のもとに「寄宿舎」が建てられました。院長自身、官舎に入らず寄宿舎の総寮部(現在の乃木館)で生活しました。この時点では皇族寮はなく、皇族の寄宿生活の場には院長官舎が当てられていました。乃木院長の死後、大正2年(1913)4月に皇族学生のための別寮として、現在の東別館が完成します。この建物には、常時数名の皇族が入寮し、控室としても使用されていました。

この皇族寮たる東別館は三島由紀夫の遺作『豊饒の海』(昭和45年)に登場しています。『豊饒の海』は四部作で、その第一巻が『春の雪』であり、『奔馬』『暁の寺』『天人五衰』と続く輪廻転生を主題とした長編小説です。この小説『春の雪』には際立ったかたちで東別館が出てきます。それは単にその建物の姿が点描されているという程度でなく、学習院を象徴する場として登場しているのです。

この小説の時間は乃木院長殉死直後の大正元年10月から始動します。そして学習院高等科生の松枝侯爵家の清頭と、幼馴染の綾倉伯爵家聡子との「禁忌」の恋がテーマであります。もともと薩摩士族出身の松枝侯爵は、自家に欠けた「雅」に憧れ、「新華族」と「宮廷」、「武家」と「公家」との合体を夢見て息子清頭の養育を綾倉家に託しました。清頭は堂上公家の家風に染まり、優柔不断で感受性と自意識のみが異様に肥大した冷たい美少年として造型されていますが、聡子と洞院宮はるの治典との婚儀に「勅許」がおりるや、俄然身命を賭して聡子との恋に殉じようとしています。「優雅というものは禁を犯すものだ」という言葉のとおり、日本古典文学に潜む恋のラディカリズムをさながら現前させた二人の恋であります。そしてもう一人の男主人公・清頭の友人本多繁邦には、そのような二人の恋の顛末を

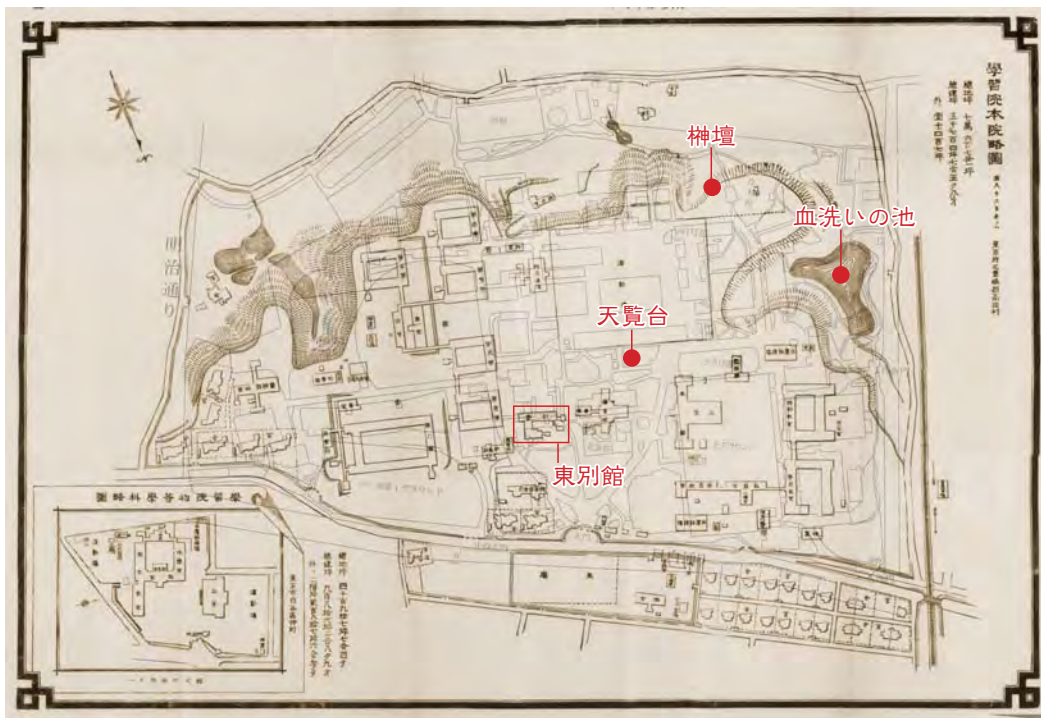
傍らから見続ける認識者としての役割が付与されています。

『春の雪』には、「東別館」以外にも「血洗いの池」「天覧台」「榊壇」(次ページの図参照)などが登場しますが、この三島の選択は大変偏っています。三島は昭和12年(1937)4月から19年(1944)9月まで中・高等科生として目白キャンパスにいましたから、空襲による焼失前の目白を知っていたはずですが、本館・正堂・図書館等の堂々たる建築には目もくれず、いわば学習院の周辺部だけをこたさら扱っています。しかし、まさにこのようなところに三島の狙いがあるのです。

## 三島の見つめた学習院

「血洗いの池」は学生たちが歴史論や哲学論を交わす密談の場であり、彼らの熱した議論も授業開始のベルとともに閉じられます。「天覧台」は、その跡地は現在確認できませんが、明治天皇が図書館完成直後の明治42年(1909)7月14日に学習院に行幸した際に、学生たちの演武訓練の様子をご覧になった場所です。また、その行幸を記念して乃木院長が建てたのが「榊壇」なのです。この天覧台が、小説世界では、学習院留学中のシャムの皇子たち(パッタナデイドとその従兄弟クリッサダ)が、紛失したエメラルドの指輪を探す場として描かれています。そして一方に指輪なんぞを一心不乱に探す彼ら皇子たちの姿を軟弱であると嘲笑する学習院の学生たちの姿が配されています。三島はなぜこんな場面を構えたのでしょうか。この指輪はパッタナデイドが日本留学の折に婚約者ジン・ジャン(クリッサダの妹)から贈られた餞別であり、そのような男女の愛を象る指輪を天覧台で紛失したかもしれぬという設定には、神聖な場を汚しているという意味性がこめられています。天覧台は囲いが繞らされた立ち入り禁止の聖域です。三島は天覧台と婚約指輪という取り合わせに悖徳的なグロテスク美学をみていたのかもしれませんが。

さてこのシャムからの留学生である皇子たちの住まいが皇族寮である「東別館」です。しかも彼らがこの建物にまったくなじめないものとして描かれています。南国の薔薇の陽光のもとに育った二人にとって、塗装もされていない木肌造りのこの寮はあまりに武骨で索漠としていました。とくにパッタナデイドは母国の婚約者の身を案じ、仏教の教理を信奉し、自己の過去生・死後生をも



大正3年当時と  
現在の校地の比較

透視する夢想癖のある少年として造型されています。すなわち、三島はこの建物にきわめて否定的ではありますが、学習院なるものの一つの典型をみているのです。三島は、この素朴にして剛健な建物が乃木院長の提唱された全寮制という教育理念の一環としてあることを強調し、院長の兵営趣味を現前させたものだとしています。いわば、その粗末なりもことさら身を窶したものだというわけです。当時の学習院全体を蔽っていた武道主義を体現した建物が東別館であり、かくしてシャムの皇子たちも学習院になじむことなく帰国します。

思えば、このシャムの皇子のみならず、二人の男主人公も乃木的スタイルの学習院に背を向ける存在であります。二人は寄宿舎に入ることを、それぞれ心臓弁膜症やら慢性気管支カタルやらの仮病を学校に申請することで拒否します。薩摩出身の松枝家ですが、清顕は綾倉家から学んだ「雅」に自らの行動原理を求め、そしてこれが武道主義以上にファナティックなものであることを自らの死をもって証明します。また、清顕の華麗な滅びを看取った本多はその後に法曹界に入りますが、そのような本多にとっても当時の学生たちの振る舞いは理知の欠片も感じられないものだったのです。

以上のように三島の小説世界は学習院を象徴する場として東別館・寄宿舎を位置づけ、登場人物たちはそれを拒否するこ



とで自身の生き方を模索していました。逆説的ですが、だからこそ学生寮とは彼ら主人公たちにとって人生の鍛錬の場であったとも言えましょう。

## 文学空間としての学習院

元来学校は小説の舞台になりにくいという面があります。白樺派の文学をみても学習院を舞台とした小説はおそらく皆無でしょう。学校という規律を教える場、しかも学習院という国家有為の人材を育成する場は、彼ら白樺派にとって一顧だにするに値しなかったと思われます。その点、三島にとっての学習院というのは、三島ならではの小説美学・行動美学を発酵させる神話的・始原的な場として大変重要な働きをしています。

ちなみに第3巻『暁の寺』の舞台は昭和の10年代から20年にかけてであり、清顕はパッタナデイドの娘ジン・ジャン（パッタナデイドの過去の許嫁と同一名）へ3度目の転生をします。このことを鑑みると、東別館の出現には、いずれ清顕をシャムの皇女へ転生させる下準備としての意味があったこととなります。あの質朴な東別館が南国シャムへの夢の入り口であったとは、なんとも目眩く三島ならではの想像力ではないでしょうか。さらに第4巻『天人五衰』は戦後日本を舞台として、清顕は透とむに4度目の転生をしたとされますが、これは偽転生である可能性があります。これらのことを踏まえて『春の雪』だけでなく、ぜひ『豊饒の海』最終巻まで読了されることをお勧めします。

東別館は一見して何の変哲もない建物ですが、そのような地味なオブジェを磁場にかくのごとき爛爛たる物語世界が創出されています。文学空間として東別館の意味を改めて強調しておきましょう。私たちは遺跡や旧跡を前に歴史的な想像力を飛ばたかせることはありますが、このように文学的想像力を発動させるトポスとして建物や場を享樂することもできるのです。